

## 戦雲はらむセレバス島

### 危険海域突破

連隊命令によって、わが第一中隊は丁棧橋から南へ4キロの渚に移動した。

途中、野戦病院のあるジャングルの近くまで来ると、河口の両岸砂浜に、友軍戦死者の木碑がずらりと並んでいるのが見えた。はや、数千名が死んでいるのだった。墓地を通り抜けて、浅泥の波打ち際を数百メートル南へ進むと、豪州兵の死体が捨ててあった。海水に洗われて透きとおるように白くなった二つの死体は、頭をならべて渚によこたわっていた。白人で、しかも水に漂白された死体は、美しいと形容したいくらい崇厳で静かなデスマスクであった。血にまみれた友軍兵士のバラバラ死体を見たあとだけに、自然に浄められた姿が印象に残った。

かれらは一昨日撃墜された爆撃機の乗組員にちがいない。沖から引っ張ってきてうっちゃったまま、さらし者にしてあるのだろう。その一つの死体が、日本軍の襦袢を着けているのをみて、兵たちは憤激した。ニューギニアかどこかで日本軍から分捕ったものと思われる。

「こん畜生、やってしまえ」

と、誰かが叫んだ。兵たちは殺気だって死体へ詰め寄った。豪州兵への憎しみが爆発したのである。

「待て――」

中島中尉が割って入った。両手を広げて叱咤した。

「退けっ、たとえ敵兵であっても、散った花を汚すでない」

死体に外傷はなかったが、すでに腐敗の悪臭が鼻をついていた。死ねば敵も味方もないはずである。私も単純な憎悪感にはやって死体を汚したりする気はなかった。彼らはまだ若く、家庭に親兄弟妻子を残して、国のために戦場に出てきたのではないのか。私たちと何ら変わりはない。むしろ山崎准尉のように豪州兵の勇敢さを讃え、壮烈なる戦死者として、同じ兵士として葬ってやるべきではないのか。

無数の小蟹が二つの死体の中にかくれ、ふたたび這い出してくるのを眺めながら、私たちは歩き出した。

鮮血のような真っ赤な太陽が、静かにワシレ湾におちてゆく。私は、源平盛衰記を想い、平家物語の一コマを睨にうかべて歩いた。たそがれの風は無常観をただよわせ、とぼとぼと行く私たちの背中を吹きすぎた。

そこから数百メートル奥のジャングル入り口で露營した。睨の奥に、敵味方の死顔があらわれ、

なかなか眠れない。血だらけの恐ろしい形相のものが、みんな泣いている。南洋カラスが露営地の  
上を渦巻いて行ったり来たり、一晩中鳴いていた。

翌日の夕刻、丁棧橋から乗船するよう命令が出た。連隊本部は現地を撤収、機動中隊とともに  
丙棧橋から乗船することになった。すなわち、連隊は三個中隊だけワシレに残し、急遽、セレバス  
へ移駐するというのである。

午後五時ごろ、丁棧橋に終結して輸送船の到着を待った。ハルマヘラ島が危険にさらされ敵上陸  
も間近なので、転進を余儀なくされたのであろう。私はそのように合点したのであったが、なぜ、  
依然として連隊が分断され、三個中隊をも死の島に残していくのかわからない。憶測できることは、  
旅団本体から分離孤立したわが輸送隊が、正規の歩兵部隊としてセレバスの第二方面軍司令部に所  
属することになったからにちがいない。

いずれは連合軍の飛び石反攻の洗礼を覚悟しなければならないが、セレバス島そのものは昭和十  
七年の占領以来、阿南惟幾軍司令官の統率下に、今も安泰ということであった。その軍司令部直属  
の歩兵部隊として掌握されるなら、ふらふら腰の幻輸送隊で逃げ隠れしているよりどれほど力強い  
かわからない。この際キッパリと海上輸送機動第二旅団から切り離されたほうが心機一転できると  
思った。

わが機動隊の行き先が、最初の目的地ニューギニアから西へ西へと移動してきたのは、旅団本体  
の行方不明か、あるいはすでに殲滅解体したことを物語るものにちがいがなかった。旅団本体はもう  
どこにもいないという風評を信じたくなかったが、本体はすでに西部ニューギニアのビアク島に逆  
上陸した際に全員玉砕したという、もっともらしい噂が伝わってきていた。去った六月に旅団本体  
はすでに影も形もなくなっていた、というのである。どこまで信ぴょう性のある情報かわかるもの  
ではない。しかし、独立歩兵部隊としてセレバスの第二方面軍の隷下に馳せ参じるなら、旅団本体  
がずたずたに寸断されて、すでに本来の機能を失い、任務に耐えられなくなったということをも  
書きするものかもしれなかった。

(戦後、わたしは旅団本体の生き残りにめぐり合って、真相を聞くことができた。旅団はビアク  
島上陸の一手手前で敵機動部隊にはばまれ、壊滅的な打撃を受けた。生き残り部隊は西部ニューギ  
ニアのソロンに漂着し、そこで態勢を盛り返そうとしたが、再び追われ、命令系統を失ったバラバ  
ラの状態付近の孤島サフリティに辿り着いた。ここで洞窟内に立てこもり、飢餓と悪疫蔓延のな  
かで終戦をむかえた。四千の兵は数百人にへっていた。旅団長は玉田少将であったという)

私たちにとって、恐怖のワシレを去って、寄らば大樹の陰のセレバス方面軍の腹中に入ることは、  
望んでもない僥倖にちがいがなかった。が、この海域はB-25の跳梁にまかしている。輸送船の影す  
らもみえなかった。部隊の転進とわかれば、たちまち出動してくる敵の編隊に食い下がるるだろ

う。たとえ輸送船が忍び込んできたとしても、乗船と同時に轟沈の運命はさけられまい。セレバスまで無傷で行くことは99パーセント不可能と思われた。

私は軍命令にも、また、連隊命令の伝達方式や時期にも疑念をだしていた。この軍命令は昨日の朝出ていたというのである。せめて昨日の午前中に中隊命令として出されていたならば、そして、丁棧橋終結があつた惨劇の前の1時間早く実行に移されていたなら、あれほどの犠牲を出さずに済んだであろう。いまさら言ってもあとの祭りであるし、あずかり知らぬ下級将校の世迷いごとにすぎないかもしれない。が、命令の出るまでは何も知らされないということ、また、危険の真ただ中へほうりこまれるまでは、何が起こるか予測もできない、目隠しされたも同然の将兵の主体性というものを疑わないわけにはいかなかった。

その将兵は第一線で肉弾として盾の役目を果たし、常に死を賭けているのであった。私は日ごろから小隊を掌握し、やみくもに号令をかけ、軍人精神を鍛えるための教育をしているが、なんの自信も資格もないのであった。軍事機密に耐え、作戦の大勢を把握できず、その場その場でわけのわからない号令をかけているにすぎなかった。一兵士にいたるまで日本軍全体の動静がわかり、われわれの進退がそれゆえにこうなるといふ、納得できる号令がだされないものであろうか。わけもわからずに死に、それで「名誉の戦死」と讃えられても空しいのである。

ただ、短い期間に人間の極限状況を越える経験に耐え抜き、九死に一生を得て、「どっこい生きている」奇跡としかいいようのない戦場体験が、私をふくめ兵たちを逞しい不死鳥のように鍛え上げたことは事実であった。

「おれには、弾のほうに逃げていくんや」などと笑っている。そこに、運命に一瞬をかけるふてぶてしさが生まれていた。その運にも今度はみすてられよう。これが寂しい現実なのだ。過酷な運命を偶然に乗り越えた逞しさにそれぞれの諦観や悟りのようなものが加わり、セレバス行きに絶望を感じている者も刹那的な生を充実しようとする傾向があらわれていた。

私たちのような下級将兵は、一面、みな陽気で単純であった。危険にさらされるセレバス行きの船を待つ間も、夜食の飯盒メシに舌づつみをうって冗談を飛ばし合っている。

これは、体で味わった死の深淵を、心の底深く秘め蓄えた人間へと成長しているからかも知れない。

丁棧橋に、一人の将校が追及してきた。手製の松葉づえをつき、ヨタヨタと片足で近づいてくる将校に私は愕然とした。重症で動けないはずの第四小隊長寺内少尉であった。

「いっしょに連れて行ってくれ」と、必死の顔つきで寺内はいった。

「軍医も衛生兵も、爆撃を恐れてジャングルへ逃げ込んだ。歩ける患者もいっしょに逃げた。重患は治療はおろか、メシも食わしてもらえない。野戦病院にいちゃ、どっちみち殺される。セレバス行きも死の行進だろうが、自分は中隊と一緒に死にたい。足手まといだろうが、連れて行ってくれ」。

負傷前は磊落で元気な男であった。今はあわれにも、かすれ声で哀願し、目に涙をうかべている

のであった。なんとか中隊に合流したくて野戦病院を抜け出し、半死半生の状態でたどりついた寺内の姿は鬼気迫るものがあった。どうして病院へ追い返すことができよう。

「俺の背中を、だれか四六時中ヨーチンで消毒してくれたら、長いあいだには持ち直すとおもったのむ」と、寺内は言った。

中隊長は、「その体でよくかえってきた」と、寺内をはげまし、特別の担架を造らせて乗船名簿に加えた。

午後6時過ぎ、友軍秘蔵の小型鉄鋼船2隻が丁棧橋に回航してきた。五・六百トン級の黒い2隻の船は、夕闇の海上に忽然と幽霊船のように出現した。1隻は丙棧橋のほうへ別れて行き、1隻は全速で丁棧橋に向かって轟進してきた。エンジンをかけたままで棧橋に横づけとなった輸送船に全員が飛び降り、5分間で乗船完了。とみるまに船は丁棧橋をはなれた。

沖合で合流した2隻の輸送船は舳先をそろえて北向きの針路をとり、白波をけたてて突進した。

今夜中にはたしてハルマヘラの危険海域を離脱できるかどうか。みんな息をのんで、魚雷攻撃を見張っている。目的地の事など考える余裕はなかった。一瞬後の運命はわからない。爆撃で轟沈するか、魚雷を食らって粉碎するか。私たちは息をつめて海のとどろきに耳をすまし、暗い暗い波濤の高まりを眺めていた。

恐怖の夜が明けた。みんな甲板上でホッと顔を見あわせた。

もう、危険海域をすぎてハルマヘラ島ははるかに遠ざかったつもりでいたのだが、おどろいたことに、やっとガレラの沖、モロタイ島の南端を通過中とわかってがっかりした。全速の轟進と信じていたが、実は4ノットのノロノロ運転であったのである。

(やあ、たいへん)

みんなそう思った。これは荒鷲乱舞下の池に、飛べないカモを2羽うかべているようなものだ。夜間はともかく、昼間は船体を敵の視界に露出するので、これからがあぶない。船に備える警備の火器はデッキに装着した重機関銃1丁だけというのも、心細いかぎりであった。。

いざ空襲となれば、逃げも隠れもできはしない。海原にただよう小舟にひとしい本船が、爆弾の集中投下を浴び、無数の水柱にかこまれて火を吹き、海底へ没してゆく瞬間を頭の中に思いえがいて、生きた心地もしなかった。

粉々の肉片となって海底に沈み、サメの餌食になるところを想像した。現実遭遇したときより想像のほうが恐ろしいのかもしれない。

しかし、浮世には万が一ということもある。まだ、何事もおこっていないではないか。肝っ玉のすわらぬ弱虫の自分をなさげなく思いながら、不吉な想像から逃れようとつよく頭をふった。

午前11時半ごろ、ガレラの方からかすかな爆音が近づいてきた。想像ではなく現実である。

やがて、黒い1機が海面すれすれに飛んでくることが見えた。

(畜生！、死神が迎えにきやはった)

監視兵は対空重機の台座をまわして、銃口を黒い悪魔に向けた。敵機は本船の左舷につっこんでくる態勢である。全員が右舷側へ駆け寄り、もの蔭へ殺到したので、船はぐいと右へ傾いた。

意気地のない私たちは、たった1機の襲来におびえ、一ところに折り重なっていた。1機くらいなら、小銃をとって応戦することも不可能ではなかった。それなのに、1機を死神のお迎えと感じ、くわばらくわばらと逃げまどい、閉じた瞼に三途の川が映っている。

後で私は、兵にまじってだらしく伏せていた自分の姿を思い出して、冷や汗三斗のさ恥をおぼえたものである。なぜ、一弾でも敵にあびせようとする積極的な姿勢をとることができなかったのか。小隊長の責任感ゼロである。しかしそのときの心境は、ワシレでの恐怖が肉体にきざみこまれていて、一機が十機にも百機にも見えたのであった。

息をつめて伏せている間に爆音はせまり、黒い大翼が頭上に影をおとし、さっと突風を吹き下ろした。百雷の轟音に、木っ端みじんにされる最後の瞬間は今だ、と身をちじめたが、何故か爆弾投下の気配もない。対空重機も火を吹かなかった。機銃掃射の音もなく、ただ突風が吹きすぎただけであった。不思議なことに爆音は頭上から遠ざかり、私たちはまだ生きていた。

「起きろ！ 友軍機なんだ」と、だれかが頓狂な叫び声をあげた。

敵機ではなかった。一同躍り上がって拍手。友軍機は再び引き返してきて、船上すれすれに旋回、一同拍手喝采に応えるかのように翼を上下に振った。そして、ガレラ方向に飛翔し去った。

どこから来たのか。偶然の通過機であったのか。われわれの護衛のためとは思えなかったが、最近、お目にかかれなくなった友軍機である。恐ろしい爆音がある瞬間を境にして、なつかしく頼もしい爆音にかわった。死が生にいれかわった。この極端・奇怪な転換を、瞬時に体験した人間の心理というものを説明することは、まだ、私にはできない。

しかし、わが軍にまだ飛行機があるという信頼感は、蘇生の喜びに加えてこの航海の前途のに瑞兆をもたらしたことは間違いなかった。

「こりゃ、乗り切れるぞ」。そんな明るい安心感を私たちにあたえた。

午後になって、めずらしく風がでてきた。空には、切れぎれの雲が嵐の気配をみせて吹き飛んでゆく。いつものスコール前兆の突風とは、様子がちがっていた。赤道直下の無風地帯にしてはめずらしい現象である。

船は激しいローリングとなり、大きなうねりと逆巻く波浪をあびて、木の葉のように翻弄された。

私たちは後甲板にかたまっていた。五百メートルほど前方を行く僚船が、押し寄せる大波をまともにかぶり、波の谷間へ船首からまっさかさまに突っ込んでゆくのが見える。マストだけ波間にのこして沈没かとみていると、今度は、波の頂上に高々と持ち上げられて船底まで空中に晒す。この船は波にゆすられて、そのうちに真っ二つに折れるのではないかと思われた。ギーギー、キーキーと、異様な音をたててきしんだ。前方からくる波に横波が加わり、不規則な三角波となって妖怪のごとく牙をむいて襲いかかってきた。うねりの頂上から真っ逆さまに谷底に落ちる瞬間、私の内臓

もかき回されて激しい眩暈をおぼえながら胃のなかみを吐き出した。

抵抗の仕様が無いのだ。甲板上、足の踏み場もないような吐しゃの汚物を、白波がザーッとあらいながしてゆく。青白い微光を帯びた荒れ狂う海のながめは、断末魔の目に映る凄絶の地獄図というほかない。ぞっとするような美しさであった。トリック映画でしか見たことのない暴風中の船のすがたを、私は現実に体験していた。こんなに恐ろしくかつ、心細いものだとは思ってもよらなかった。異様に大きい海のまっただなかに、なんと人間は小さく無力で、孤独であるのだろうか。

私たちは、口々に念仏のようなものを唱え、海の怒りの収まるのを待ち、原始人のように祈りをささげているよりほかに為すすべをしらないのであった。

(どうか沈まないでくれ。たのむ、たのむ)

体の蝶番がバラバラにされてしまったような暴風との悪戦苦闘は、およそ三時間も続いた。船の速力は半減していたが、午後二時すぎにやっとモロタイ水道を通過、舳を左へ転じた。風は次第に凪ぎ、船の揺れも軽いローリングにかわった。波浪の当たらない場所へ這いずってゆき、横たわっている兵たちの目は茫洋とかすみ、あとはどうにでもなれというようにうつろに見開かれていた。やっと平常の呼吸をとりもどしたものの、みんな死にぞこないのミミズのようにヒクヒクと伸びたままであった。

精気を取り戻したのは、日が暮れてからである。

「ひやひやのれんぞくやったなあ。肝が上がったり下がったりや」と言いながら、ひげ面がわらっている。人間らしい笑顔がもどった。やはり、何事もあきらめてはならない。浮世の万が一ということは実際にあったのだ。すでに危険水域は突破して、空襲も潜水艦の魚雷攻撃もうけなかった。

思うに、赤道直下にはめずらしい長時間にわたる暴風雨は、私たちだけでなく敵軍にも同様に襲いかかったにちがいがなかった。まさに、大自然の天候異変が天祐となって私たちを救ったというべきであろう。

日没を迎え、私たちは水たまりの残っている甲板上にずぶ寝れの毛布を敷いて寝ころんだ。どうやら九死どころではなく九十九死に一生を得たような悪運の強さを、冗談めいた語り草にして、唇に笑いをうかべたやすらかな寝顔で眠りこけたのであった。

翌、八月十七日の昼過ぎ、はるか前方の水平線に一文字の陸地がうかびはじめ、次第に細長い山脈のかたちをあらわしてきた。

「セレバスだ、セレバス島だ」

という歓声が、甲板上に沸騰した。

山の稜線のすんなりふくらんだ部分は、標高二千メートルのメナド富士らしい。セレバス島の高山のひとつに数えられるクラバット山である。私たちは狂喜し、目に涙をうかべていた。との

午後五時すぎ、船はセレバス島北端東海岸に接した細長い小島、レンベ島との間の水道を縫って

進む。やがて、ビトンの港のすべり込んで、二隻のボロ船は棧橋に横づけとなった。

港の光景、海岸線のたたずまいを一見しただけでも、ズタズタに切りさいなまれて悪銭苦闘中のハルマヘラ島と違って、敵の侵攻のおよばぬ平和の息吹が感じとられた。オランダ軍を追っ払ったあとの日本軍が、厳然として占領状態を確保している様子が、一目で看取されるのであった。

私たちは、安心しきった表情で棧橋に降り立った。その先頭を白木の英霊が行く。あの暴風は神風であったのだと思ひ浮かべながら。そして、おそらくこの白木の霊が私たちをセレバス島へ誘導し、護り通してくれたのだと。

### 極楽の三丁目

セレバスはインドネシア中央部東寄りにあるK字形の大島である。

面積は約十八万九千平方キロメートルで、日本本州の八十三パーセントにあたる。北にミナハサ半島、東に東部半島、南部に南東半島と南西半島の二つが突出している。全島ほとんど山岳地帯で、トンダノ、トゥティにはおおきな湖水がある。

人口約五万のマカッサルと二万のメナドの市街地をのぞいては、ジャングル、椰子林、草原、湿地の山岳地帯に、ちいさな町や村が点在しているだけである。それぞれの地域に多くの種族が割拠しているが、外人であるアラビア人や華僑も合わせて、総人口はおよそ六百万人と推定されている。

部族の主なるものは、北部ミナハサ族約三十万人、北部セレバス族・中部セレバス族・中南部トラジャ族を主とする山岳族約百万、南西平野部の文明ブギス族とマカッサル族の約四百五十万である。

各種族ごとに独自の土語があり、酋長は絶対的な権力をもっている。なかには、我が国の四国ほどの領域を支配して権勢をほしいままにしている酋長も存在するという。

住民はほとんどがイスラム教徒で、キリスト教徒は火山地帯で人口も密集しているメナド周辺に集中している。

島の共通語はマレー語であるが、都市部をのぞいてはほとんど普及していない。住民の九十パーセントは無学文盲で、小学校すらない。

今次戦争緒戦にこの蘭領セレバス島を占領したのは、海軍陸戦部隊であった。まず、オランダの守備隊が守るミナハサ高地の飛行場に降り立ったのが海軍落下傘部隊で、その華々しさは今なお語り伝えられているほどである。爾後、セレバスは海軍の軍政下におかれた。私たちが上陸した昭和十九年八月の時点では、連合軍の反攻必至とみて、それに備えるべく陸軍の精鋭・関東軍が第二方面軍としてセレバスに進出してきてから約二年、セレバス島北東部に二万、南部に一万余の兵力をもって防備していた。

海軍は、南北にそれぞれ約五千の兵力を配備しているだけで、陸軍が主力になっていた。軍司令官は前にも述べたとおり、終戦時の陸軍大臣・阿南惟幾大将である。

ビトン棧橋に着いた私たちの目に、一キロメートルほどの長い海岸線が東西に延びて、椰子林と、その背後に迫るジャングルの規模が、島の雄大さを思わせた。宿営地へ歩いてゆくうちに、先着友軍がメナド富士とおしえてくれたクラバット山が、美しくそびえたって見えてきた。

さらに、ビトン港の対岸に狭い水道をへだてて横たわるレンベ島の絶景を目にして、思わず歓声をあげた。

日本軍が厳然と守りぬいている、治安の確保された島の平和の息吹き。何とか生き抜いてやっと上陸した私たちには、島の風景がより美しく、より新鮮に見えたのも当然のことであろうと思う。

椰子林の間に点在する部落にも戦争の爪痕はなかった。平和そのもののような現地人の素朴な暮らしが垣間見えて、私たちは感動した。裸体で禪一丁のハルマヘラ土人とは全く違う。

かれらは男も女も、日本の腰巻をダブルサイズにしたような、花模様や縞模様のサロンを腰に巻いていた。黒人ではなく、日にやけた褐色の肌の色で裸足で歩いていたが、若い娘などは漆黒の束髪に野生の花をかざしにさしている。彼らのニッパ葺きの家の軒には、よく熟れたバナナの房がたれさがっていた。どこの家にもバナナの房がたっぷりと取り巻いている感じの豊かさに、私たちは目をみはった。ここはバナナが大量に生る島にちがいない。ハルマヘラ島では、一本のバナナにもありつけなかったわたしたちである。

「こりゃあ、バナナが腹一杯食べそうやで」と、皆、ニタリニタリ、ごきげんであった。

何度も死の恐怖に襲われ、生死すれすれの危機感を精神的にも肉体的にも乗り越えてきた私たちにとって、セレベス島は天国に近かった。生きているという実感のすばらしさ。死の深淵を覗き見た者にしかわからない生の快樂と言おうか。なにものかに手をあわせたいほどのきびんであった。

ハルマヘラ島でわたしたちは行く先々で木を採り、草を葺き、溝を掘って自分の住む家をつくったものだった。ところがセレベス島では、すでに先駐友軍が建造してあった立派な宿舎をあてがわれたのである。

棧橋から数百メートルの内陸部に、まだ真新しい小学校の講堂のような建物ができていて、そこへ案内されたときは夢ではないかと目をうたがった。この宿舎は「ガラン堂」とよばれていて、スクールに遇ってもびくともしなかった。

宿舎の裏からジャングルに入る周辺に、無数のバナナ畑がひろがっていた。最初の命令受領で連隊本部に集合した将校たちは、「現地人の宝である果樹を損じてはならぬ」、という厳禁命令を受けた。いまや私たちは、独立の舟艇輸送隊でも彷徨の通過部隊でもない。治安の確立されたセレベス島の守備隊として、軍規厳正な第二方面軍司令部に掌握された以上、命令は遵守しなければならぬ、という厳しいお達しであった。

しかし、命令受領の将校たちが自分の所属中隊にもどると、「やるならあ要領よくやれ」と、兵

たちに伝達したのである。軍命令はあくまで理想なのであって、裏には裏があった。背に腹はかえられない。

さっそく、厳禁命令の通達主である将校が先頭に立って、中隊全員が「要領よく」食料蒐集にかけた。もぎたてのバナナを、食って食って食いまくった。その日一日で三十本も平らげたツワモノもいた。彼はてき面に下痢と腹痛で七転八倒した。

「バカモノ！ セレバスまで来てバナナと心中する気か。要領の限度を超えたやつは軍命令にしたがって厳罰に処す」将校は叱った。そのあとで爆笑した。

私も率先垂範してバナナを食ったほうである。セレバス島のバナナは、実に二百五十種ほどあった。内地で見慣れた台湾バナナ風の規格型はもちろん、巨大なマクワウリ型のマンモスバナナから小指大のモンキーバナナまで、サイズ、色かたち、味覚など、千差万別なのである。

私たちは、できる限りの種類を採集してきてずらりと並べ、片っ端から味覚をたのしみ、品評会を催したりした。断面が三角形のバナナ、てんぷら用のバナナなど賞味してみたが、日本人の口にあう最高のバナナは「ピサンアンボン」と決した。

ピサンアンボンは規格型に近いサイズであるが、まだ薄青い皮の色でも中身は完全に熟れていた。ひと噛みすると薫香とともに甘酸っぱい独特の風味が口中にひろがった。ピサンとは現地語でバナナのことであるが、私たちにとってピサンはアンボンバナナを指す名詞になった。アンボンさえあれば他種のバナナがそばにころがっていても、誰も見向きもしないありさまであった。

「ああ、ハルマヘラに残ったやつらに、これをひとつでも食わしてやりてえな」

私たちは、不遇な戦友の身を想いながらビトンの生活を堪能していた。セレバス産のうまいコーヒーにもありつけるようになった。その他、マンゴスチン、ランプータン、椰子の実、パイナップルなども賞味できた。米は、丸粒の旨いセレバス米が配給され、副食も水牛の肉、塩干魚、南瓜、キュウリ、茄子などが出回ってきて、栄養にはことかかなかった。宿舎の夜明けはおびただしい小鳥の鳴き声で目を覚まし、空襲の爆音は一日中間こえなかった。

私たちは一週間ほどですっかり元気を回復した。ハルマヘラ島を地獄の八丁目とすれば、さしあたりセレバス島は極楽の三丁目ともいうべきか。信じられないほどの幸運であった。

八月二十四日、米軍重爆 B-24 一機がセレバス島上空に侵入、一万メートルの高度で旋回しつつ消え去った。

「おいでなすったな」。みんなドキンとした。偵察と日本軍施設の写真撮影。その出現のしかた、青空での旋回から消え方までの一切が、ハルマヘラ島での大爆撃直前とそっくりそのままである。

ハルマヘラ島を完膚なきまでにたたき伏せた米豪連合軍は、くびすを返して私たちを追いかけた。覚悟の上ではあったが、たった一週間の極楽生活とは殺傷な、と、顔をみあわせた。

私たちを休ませてくれたガラン堂は、上空から見通しの好目標でしかない。離れるにはおいしい環

境であったが、撤収を余儀なくされた。

二十八日にビトンの西方十キロのさびしいK村（カウディタン）に移駐した。ここは、鬱然たるジャングルに囲まれていて、待避壕を掘ればまず安全地帯とみうけられた。まだ、極楽の何丁目かであることは間違いならしく、近くに温泉川もながれていた。

ある日のこと、ハルマヘラの残留部隊から、連絡の将校と兵がカヌーを漕いでビトン港に着いた。全身をまっ黒に塗りたくった土人の姿で、シャツに階級章を付けていた。第四中隊長の瀬尾中尉と兵三名である。

かれらの言うところによると、ハルマヘラ島の各港湾には一隻の船舶もなく、死の海と化している。二十一日に大空襲があり、ワシレ北地区にあった軍司令部は壊滅的打撃を受け、吉田大佐、山本少佐の両参謀はじめ、多数の将兵が戦死した。セレバスに行った戦友の顔を見たいこともあったが、やむにやまれぬ気持ちで脱出し、連隊長の指示を受けるために決死の航行をつづけてきた、というのである。

「よく来た。しかし危険海域をカヌーでよく突破できたものだな」

関根中佐は感激の面持ち言った。

「敵機に四回遭いましたが、手をふって騙しました。どこから見ても土人そっくりですからね」瀬尾中尉は豪快に笑ったが、関根中佐は中隊長の独断専行を人情で受け入れることはなかった。それは無意味な行動にすぎず、作戦圏外の無謀にほかならないからである。三日のち、瀬尾中尉以下四名は全身を黒く塗りなおし、ふたたびカヌーを操ってハルマヘラにかえっていった。

私は、軍事機密、作戦、命令系統についてはいつも判断に迷うほど無知であるが、下級であっても小隊をあずかる少尉が何も知らされていないという事実に疑問をだしていた。それほど、上層部の作戦指導が混乱し、大東亜戦争全域におけるわが軍の頑迷と狼狽ぶりが推察されるのであった。

セレバスの第二方面軍司令部の将校から連絡の際小耳にはさんだのは、すでに東条内閣は敗戦の責任を負って七月十八日に退陣しており、小磯・米内内閣が誕生しているとのことであった。このような重大事が真実なら、何故、軍司令部命令もしくは会報で全将兵に伝達しないのか。おそらく、将兵の動揺と士気の低下、非戦論の発生などをおそれてのことに違いないが、事ここにいたっては、知らされないことの不安のほうが大きいのである。

連隊内の消息——たとえば、決死の覚悟で連隊長の指示を受けに来た瀬尾中尉以下四名が、はたして無事ハルマヘラ島にたどり着いたのか、また、ハルマヘラに残された三個中隊がその後どうなったのかさえ、私たちに知らされなかった。敵の反攻に寸断されてバラバラになり、命令系統も混乱してしまうほどの状況なら、何としてでも瀬尾たちをセレバスにとどめることができなかつたのか。これも私にはよくわからなかった。

瀬尾たちがあわれにもカヌーを漕ぎだしていったとき、戦争の無情・非情に息をつめるだけで、私たちはどうすることもできなかつた。その直後、また不思議な軍上層部かあらの命令が出て、私

たちをおどろかせた。

それは、第一中隊第二小隊長・下村少尉（台北出身）に比島マニラへの出張命令が出たことである。出張目的は、関根部隊に配属されるはずの大型発動機船の宰領というのであった。今頃になって輸送隊の舟艇が配属される。どう考えてもわからなかった。

もしかすると私たちは今でも元のままの輸送隊であるかも知れない。そうであれば、海上機動第二旅団は存続していなければならないはずであった。西部ニューギニアで全滅したという情報は誤りであったのか。私たちが本来の輸送任務に就くことは、これが、マニラ出発以来の本来の目的であるのだから「舟艇受領」の命令は吉報といってもよい。しかし、どう考えても納得いかないのは、死の大航海を生き延びてセレバスまでやってきた舞台に、また、マニラまで引き返して舟艇を受け取れという無茶な命令の出どころである。

しかし、不思議であろうとむちゃであろうと、命令には服従しなければならない。反問はゆるされない。「おかしいじゃないか。いまごろそんなことを言うのなら、なぜ、マニラ出発のとき、舟艇をつけてくれなかったんだ」と、言いたいところである。

下村少尉は、下士官・兵二十名を従え、勇躍、フィリピンにむけて出発した。フィリピン行きの便船があることも不思議であった。このような命令が狂気の沙汰であることは、だれでも感じたし、彼らが無事に帰ってくると信じている者はいなかった。ただ、僚友の武運長久を祈って、私たちは棧橋まで見送った。案の定、彼らは永久に戻ってこなかったのである。

かれらの消息は、戦後風の便りに触れただけそれっきり断絶した。全員戦死・行方不明ということである。

（風のたよりに言えども、死人に口なしで真偽のほどはいまもってわからない。かれらは運よくマニラに到着し、大発舟艇数隻を宰領してセレバスに戻る途中、白昼敵機に捕捉されて全船撃沈された。ごく一部の者が無人島に漂着したらしい、というのが風説であった）

もし、下村少尉でなく私に命令がくだったとしたら、私が下村の運命をたどることになったであろう。紙一重の運命の差というしかない。第一中隊の生き残り小隊長は、私と下村のふたりしかいなかった。舟艇受領は下村でなかったら私、私でなければ下村であった。

小隊長五名のうち、浦川恵一、郷祥の二少尉はすでに戦死していた。そこへ下村少尉をとられ、寺内少尉は重傷治療中の身であってみれば、使い物になる健康な小隊長は私ひとりになってしまった。私は、中隊の最右翼、上級将校として責任が倍加した。

ハルマヘラのガレラ上陸を前にデング熱で生死の間をさまよっていたときは、中隊で真っ先に死ぬのは自分だとおもった。まだ二十六歳の青二歳で、小隊長の任務に耐えられるとは思わなかった。その臆病者のぼんぼん将校が、中隊でたったひとり生き残りの小隊長になったとは、もはや、運命というより仕方がないではないか。

私は運の強い生き残り小隊長となり、現在の中隊では中島中隊長のもっとも有効な手足のひとつ

となった。連隊長の関根中佐も私を認めはじめたようであった。中隊長代理で連隊本部へ連絡に行くこともしばしばであった。わたしはもちろん連隊長を絶対に信頼している。信頼しなければ命令によって動く戦場で、一日も生きていられるものではなかった。

しかし、命令の非情と不条理に突き当たると、軍上層部への疑惑がはらいきれなかった。他の将兵の陰口もみな同じであった。

そのころ部隊内では、真実かどうか知らないが次のような風評が流れていた。

関根中佐は陸軍大学校出の秀才で、将来は閣下に昇進できるエリートコースの現役軍人であったが、なぜか、中佐で退役した。その理由は、彼がきわめて慎重な性格であったから、というのである。慎重、かつ頭脳明晰で緻密な秀才が、なぜ玉にきずとなったのか私たちにわかるよしもない。しかし、日常の命令や指揮の中に、「なるほど」と思わせるような彼の性格があらわれるのも事実であった。絶対の権力を行使する頑固さのなかにも「玉に傷」の根拠が読み取れないこともない。

関根中佐は、現役バリバリの若い中堅将校ではない。いったん退役した予備役として今次大戦に招集された初老の連隊長なのである。そのせいか、たしかに無理をしない性格であった。それにしても、ビトン上空に敵機が二、三回あらわれたとき、命令受領に行ったわたしたち各中隊将校に、ハルマヘラ島ワシレの空襲で擦過傷を受け、まだ鼻柱にバンソウコウを張り付けている関根中佐は奇妙なことを言った。

「今後、行軍に際しては、いかなる小単位でも一列縦隊を厳守されたい。兵と兵との距離を三メートル以上とし、道路の真ん中は避けて側端を更新し、常に木陰を活用すること」

解散したとき、将校たちは首をかしげていた。行軍は四列縦隊にきまっている。一列で、兵と兵との距離を三メートル以上も開けるなどは、空襲時の兵の損害を少なくしようとう連隊長の親心としても、少々納得しかねた。しかし、命令を拒否するわけにはいかない。「死ぬ」と言われれば死なねばならぬ軍隊なのである。

「かっこ悪いことになったぜ」と、関根中佐の命令を一面で失笑しながら、実際上の指揮者にあたる将校としては、さっそく実行に移さねばならなかった。

私は、一列で三メートル間隔、道の端を歩かせる行進方法を取り、カウディタンからビまではトン港まで毎日小隊を指揮して荷役作業に通った。敵の大爆撃がはじまるまでは、私たちにとってセレバス島は極楽の島であった。

## 火事場泥棒

私は、関根中隊長の命令を忠実に守った。部隊を引率するとき、一列で行進させることである。百名を引率するとき、隊列は三百メートルにもおよんだ。わたしはその滑稽さを知っていた。服従せざるを得ない命令であるが、ことの如何によっては嗜虐的な心理におちいるものである。そのう

ちに他部隊の将校から難詰されて、散々な目にあうことになるかも知れないと覚悟していた貨物廠の兵士たちは、この奇妙な一列縦隊がやってくるのを見ると、「一列一個連隊」と言ってわらった。

わるい予感の間もなく的中した。

更新中、佐官級の赤い標識をひるがえした乗用車とすれちがって、私はストップをかけられた。乗用車は、先頭のわたしのところまで戻ってきてとまった。出てきたのは参謀肩章をつけた少佐で、「指揮官はと、その少尉か。なんだ、このざまは」と、目に怒りをとがらせて私につめよった。とうとうきたな、と思い、わたしは不動の姿勢をとった。悪い人に見つかったものである。少佐は第二方面軍司令部付きの富田参謀であった。

「これは、演習か」

と、少佐は威嚇のなかにあきれたような表情をたたえて、私をジロジロ眺めた。

「いいえ。敵機来襲に備えて、待避の隊列行進を実施中であります」

「馬鹿野郎。どこに敵機がきておる？ どの部隊か、連隊長はだれか」

「はっ、海上機動第二旅団輸送隊、連隊長は関根中佐殿であります。この隊形は連隊長命令であります」

この場合、少佐が一階級上の中佐に文句をつけることはない、ということも私は心得ていた。私は命令に従わなければならなかった下級将校として、むしろ、軍参謀にことの正否を聞いてみたかったのかもしれない。だから悪びれなかった。

「ビクビクしているからだ。よくない。卑怯者だ」

と、富田参謀は吐き出すように言った。

「爾後は許さぬ。規定どおり四列縦隊で行進せよ」

「しかし、連隊長の命令であります」

「貴様！ 少尉、よいか。こんどみついたら直ちに一つ星の兵隊に降等する」

「はいっ」

私は少佐に敬礼し、目の前で四列縦隊に隊形を変えた。参謀の車は去った。私はなぜか、叱責されたことが心地よかった。そして、多少おかしかった。

三十五、六歳、陸大出の張り切った少佐のいうことのほうが、連隊長より正しいにきまっていた。しかし、少佐は中佐を責めることが出来ない。少尉の私なら叱りとばせるのだ。

私は、連隊長の命令を実行することの滑稽さを知り、嗜虐的な心理状態になっていた。それを少佐参謀が証明してくれたのだと思った。階級制度や、命令の厳肅さにともなう、軍隊のユーモラスな一面である。これを笑えなければ、戦陣での軍隊生活は一日もつとまるまい。

私は以後、連隊本部や中隊の宿营地付近では一列行進を実行し、遠くへはなれると四列にあらためた。上官の命令は絶対に服従するが、こんなことで一つ星の兵隊に降等されてはたまったものではないからである。

敵機は間もなく来襲し、連日の爆撃がはじまった。一列縦隊の待避行動も状況に適したものとなる。こうなると、五十七歳とかいう連隊長は、たしかに苦労人であった。関根連隊には一兵の損害もなかった。「一列一個連隊」とあだ名をつけて馬鹿にしていた貨物廠の兵隊も、はじめて爆撃の洗礼を受けるとジャングルへ逃げ、行進のときは間隔をとった一列もしくは散開の隊形をとらざるを得なくなった。

八月末日、米軍機大編隊がビトン上空に飛来し、野外に堆積した貨物廠の貨物を粉碎した。重爆B-24六機編隊、新鋭戦闘機P-38を従えて、一千メートルの低空から猛爆をつづけた。在来部隊は泡を食ったが、ビトンとカウディタン村間で貨物の隠匿作業をやっていた私の中隊は、爆撃の待避では一日の長があった。行進時の散開隊形だけでなく、作業中の待避準備も完璧なものであった。米軍機の偵察侵入から威嚇爆撃、本格的な殲滅低空猛爆にいたる行動まで、事前に肌で感じとれるほどであった。

逃げ足は抜群。ジャングルに逃げ込むと、本能的な嗅覚で獣のように自分に合った穴を見つけた。自分のからだに合わせた穴を掘り、その穴の中でじっと目を光らせ、絨毯爆撃の轟音、低空銃撃音、地上砲火や空中戦の様相を正確に聞き分けられる耳に全神経を集中していれば、高見の見物同然であった。

友軍の高射砲によってP38一機を撃ち落とされただけの敵編隊は、凱歌をあげてレンベ島東方の空へ飛び去った。これでしばらく来ない、ということを私たちは知っている。午後五時頃、穴からもぞもぞ這い出して、中隊は帰途についた。

爆撃の跡は惨憺たるものであったが、私たちは慣れていた。身を守ることには鉄の鎧をまとったかのように自信満々であった。ひとりも損害がないことも自信をふかめる根拠になっているのであろうが、一同ケロリとして、阿修羅の戦場を日常茶飯事とこころえている。ふてぶてしいほどであった。

私は相変わらず一列縦隊の指揮をとりながら感動していた。今や、兵士たちは鍛えられて、みちがえるようにたくましくなったのではないか。

K村に近く、後方から近付いてきた乗用車が、戦闘の私の横で急停車した。

「停止！」と叫びながらとびおりてきたのは、富田参謀であった。

「なんだ貴様か」

私は参謀に敬礼した。敬礼を返した少佐の顔は、私たちの一列縦隊を難詰する顔ではなかった。むしろ、ここで会った奇遇を喜んでいるように見えた。

「ご苦労だが、急遽、ビトンへ反転してもらいたい。ビヨンの貨物集積所が爆撃でやられた」と、富田少佐は言った。

「貨物廠の作業員は損害を受けた。貴公たちに整理作業をやってもらいたい。敵は今日明日にもやってくるかもしれん。朝までに完了せよ。隊長には自分から言うておく。わかったか」

「はっ。これよりビトンにいたり、貨物整理作業に任じます。トラックは差し向けていただけますか」

「後刻、多量にだす。ようし！」少佐は満足そうに叫んだ。

「夜を徹して残品を積み込むんだ。ただし、今夜は特別給養をうんとこさ届けてやるぞ！」

私は隊を回れ右させた。駆け足行進の必要上、隊列は四列縦隊とした。私たちは靴音高くビトンへ向かって走りだした。私は、莞爾とした富田参謀の顔のなかに、無傷の一個中隊に遭遇した喜びがにじみ出ているのを感じ取っていた。少佐はきっと、私たち一個中隊の存在を頼もしく、且つ、不思議にさえ思ったのではなかろうか。あれほどの恐怖の爆撃にさらされながらこの中隊がビクともせず、余力十分の精気を湛えていたのだから。

ビトンに着いたとき、あたりは薄紫の暮色に包まれていた。貨物集積所の軍貨物は見る影もなく破壊され、吹き飛ばされていた。あちらこちらで炎がたち、焼けくすぶり、臭気は鼻をついた。戦死傷者はかたづけられていたが、窪地の水たまりは赤く、散乱した貨物には肉片がへばりつき、目をおおう惨状である。

貨物廠の兵士たちは爆撃直前まで、他部隊の兵士たちに指一本触れさせまいと貨物を守って、ほどほどにピンハネしていた有様がめにかが。爆撃を受けた経験のない彼らは、もろに被害を受けたものと思われる。

私たちは、軽い携帯口糧の夕食をしたためてから作業にとりおようにかかった。もう、あたりは暗くなっており、ちらちらと鬼火のように燃えくすぶる明かりで、貨物の整理をはじめた。下積みの頑丈な木箱やブリキ製の梱包は無事であったが、吹き飛ばされた木箱や麻などの袋、藤編みや藁の菰包みなどの物資はほとんど使い物にならなかった。やがて、輸送トラックが、第一陣、第二陣と到着してきた。被害の少ない貨物からトラックに載せて行き、掛け声も勇ましく深夜まで突貫作業をつづけた。

兵士が、破損した貨物の中から食料品をみつけだした。糧秣類は一か所に積み上げられていたらしく、散乱したもののなかに、乾パン、コンビーフ、甘味料、煙草などが混じってオタ。兵士たちは蟻のようにたかっけて行った。汗だくだくの徹夜作業で皆、腹がすいていた。働きながら、落ちていた食料を手あたり次第にむさぼった。

日本酒や葡萄酒まで見つけた。このようなとき、兵隊たちは嗅覚の天才と言ってもよいくらいであった。初めのうちは食品の散乱に驚き、こわごわ拾って食べたのだが、しまいには嗅覚で探し出した。酒を見つけた連中は、「におうぞ、におうぞ」と言いながら探し当てたものであった。まるで火事場泥棒というべきであろう。銃後の人々の熱誠をこめて送られてきた貴重な糧食を、火事場泥棒式にくすねるのは皇軍のなすべきことではあるまい。この状況下で、軍規厳正を訓えるべき立場の指揮官が黙っていてもよいものか。私は考え込んだが、結局、見て見ないふりをした。

戦場にも、どさくさまぐれというものがあるのだった。命令を下せば兵士たちはやめるにちがいない。しかし、こんな僥倖は二度とあるまい。どうせ、だれかにとられてしまう廃棄物や乱梱ではないか。私たちはビトン上陸以来、小型羊羹一本、煙草一日当たり四本しか支給されなかった。みんな飢えていた。しかも、摂取カロリーをこえる重労働を強いられている。猫に鯉節の状況を与えておいて「貨物に手を付けたら厳罰に処す」などと、野暮なことが言えようか。

私は、「特別な給養を与える」と言った富田参謀にも腹をたてていた。トラックが運んできた参謀特別給養というのは、一人乾パン二枚と、南洋豆のまずいぜんざい一杯であった。これで朝まで働けというのか。こちらはとろうと思えば何袋もの乾パン、百本もの煙草、菓子や羊羹の箱詰そっくり、おまけに缶詰にワインまで、目の前に転がっているのである。こんなチャンスは二度とない。闇夜の泥棒も戦場の役得というものだ。みんな食え食えと、私は心の中で叫んだ。

実際に、広い貨物集積場に分散して働いている全作業員を取り締まるということは不可能だ。私はこのような場面で指揮官が黙っているということは、いざ本物の戦闘となったさなかに効果を発揮するにちがいないと思った。兵士たちも人間である。話のわかる隊長ということ強く印象づければ、おのずから強固な団結力が養われる。この泥棒ネコは単に暴行掠奪を行っているわけではない。私はそのように自分自身を納得させたが、部下と一緒に食料を拾ってむさぼり食うわけにはいかなかった。将校の辛いところである。

仕事は片づき、朝がおとずれた。帰営するために整列をかけると、さすがの私もおどろいた。戦利品を身につけて、皆、体がふくれあがっている。

軍服のポケットというポケットには甘味料がいっぱい詰め込んであり、背中に結び付けた鉄帽の中もいっぱい、二十センチほど背中から浮きあがっている。風呂敷包にして腰にくくりつけているのもある。大胆な者は、梱包ごと持ち運ぶつもりか、後尾のほうでゴソゴソやっているのであった。あまりにひどいので、これは服装検査を試みみな吐き出させてやりたい気持ちがむらむらと起こった。

私の顔を察してか、笠井上等兵が私の伝令に近づいて、こう言った

「小隊長用の葡萄酒、二十四本入り木箱は俺がもってるからな中隊長殿の申しつけなんだ」  
私は苦笑した。ぬけ目のない利口な兵隊にはかなわない。私だって葡萄酒ぐらい飲みたかった。小隊長といっても、部下兵士の中では年が若いほうである。人間としては食い盛りの青二才でしかなかった。

「小隊ごとに一列縦隊で帰営する。気をつけ。そのまま、右向け右っ、前へ進め！」

号令をかけ、私は笑いをおさえながら先頭を歩きだした。

## メナド港

九月初旬（昭和19年）メナドに移った。メナド港の揚塔作業に従事するためである。セレベス島の北東部にあるメナドは、ミナハサ族が原住民族で、コプラ、コーヒーの産地として知られている。ミナハサ族は服装も都会風に洗練されており、目をみはるほど日本人に似ていた。オランダがセレベス島を植民地としたとき、現住民族をキリスト教に教化して文明人として育て、東南アジア各種族とオランダとの橋渡しにしようと図った。そのため、ミナハサ族の中からオランダの官吏や軍の下級将校などがでており、彼らはセレベス島現住民族中、最高の文明人に育ったのだという。

今次の戦争の緒戦において、メナドのオランダ人は日本海軍に追い払われてしまったが、何故かミナハサ族は私たちに友好的であった。高齢者の皮膚の色は一般的に淡褐色で、少しけわしい目つきなどにはインドネシアの血が濃厚に感じられる。しかし、幼年期青年期の若年層ほど淡いピンクの肌色が多く、日本人そっくりの風貌を見るのである。親しそうに近づいてきたある現地人は、自分の祖先は日本人に違いないのだと、お世辞を言ったりした。

英語を話せる知識人に聞くと、タイに山田長政がわたった時代に、多くの日本人が東南アジアの島々に分散移住し、セレベスのメナドではミナハサ族の女性と結婚して住みついた者がかなりの数あったという。

日本軍に跪拝するためのお世辞で眉唾ものにちがいないと思われるが、日本人そっくりの子供や墓、塚、垣根などに日本人の風習を感じさせるものも残っていた。

いずれにせよ、先駐海軍部隊が厳然と港の治安を確保しており、街も平和なたたずまいをみせて、現地住民が歓迎してくれるのだから、こんなありがたいことはなかった。

メナドへの今回の空襲は偵察程度の段階で、防空壕などは海軍の手でかなり整備されてあったし、被害はほとんどなかったらしい。私の勤では、三十キロ離れているだけのビトンに重爆B-24が跳梁しはじめたのだから、ここメナドも数日の平穏かも知れないと踏んでいた。考えてみると、私たちが移駐する場所は、移駐直後に必ず爆撃を受けた。大爆撃を受けてから次の移駐地に移る。私たちは常に爆撃に追われ追われて転進する、奇妙な渡り鳥部隊といえよう。見方を変えれば、敵の弾は永久に当たらないという幸運を与えられているかもしれない。

メナド港での作業開始の前日に、関根中佐は部隊の将兵に外出の許可を与えた。かつてないことであった。将兵が外出できるほど治安が維持されており、敵襲の危険もないということの証明に違いなかった。

私はひさしぶりの解放感に足取りもかるく、同僚の機動中隊小隊長・斎藤少尉（岡山県出身・新居浜高工卒）、三好少尉（大阪市出身・大阪外語卒）と一緒に外出した。

おどろいたことに、メナドの街から南八十キロほどの山中に、日本人経営の料亭「隅田園」が

あった。人づてに聞いて、やっと料亭にたどりついたが、「陸軍さん」は佐官以上でないとおそべないという。南方に来て以来、ひとりも見たことがなかったなつかしい日本女性が七、八人働いていたが、強引に上がり込んだ私たちも、えらい「海軍さん」の登場で追いかえされた。

この料亭は最初にメナドに入った海軍が造った「海軍施設」ということである。南方作戦の緒戦の勝利で、各占領地は日本の植民地となり、内地から料亭経営者なども娘子軍を引き連れてきた。隅田園もそのひとつであろう。当初はメナドの街中に豪華な店を開いたが、戦況の悪化に不安をおぼえ、山中に待避したものと思われる。

私たちは下級将校の悲しさで、懐かしい日本の女性にめぐり合いながら退散のやむなきにいたったが、考えてみればあの女たちはどうなるのか。敵の再上陸が必至であればたちまち袋のネズミとなり、最初にいけにえになるのはあの女性たちではあるまいか。メナドのみならずフィリピン、シンガポールなどにも大挙進出した大和なでしこはどうなるのだ。

今日一日の外出をゆるした関根老中佐の温情を私は理解していた。明日はどうなるかわからない、だから、大いに遊んで来いという、危機を覚った指揮官の決断に違いないのだから。ああ、負けたくない。戦争というのは勝たねばならぬ。

私たちは、陽気に話しながら山を降ったが、宿舎が近づくにつれて解放感はいつの間にか消え、どす黒い敗戦めいた圧迫感が胸をしめつけてくるのであった。

翌日から作業開始であった。関根連隊長は、大爆撃を予感して、例によりすかさずメナド市中より四キロ西方の山中へ、宿舎を移動した。そこから毎朝、昼食携行で埠頭作業場へ通った。作戦（作業）戦闘指揮所はメナド港の先端にあった。総指揮官は富田少佐である。私は第一棧橋作業場長、斎藤少尉が第二棧橋作業場長である。

五百トン級の小型鉄鋼船が入港してきて、貨物の揚陸作業がはじめられた。いつもと違って、作業はきつかった。指揮所からは、昼夜兼行の突貫作業を命じられた。数日中に、敵反攻上陸に備えての歩兵部隊が、五千トン級の輸送船二隻に分乗してメナド港に入ってくるというのである。それまでに、すでに揚陸されている貨物の集積・運搬・片付けを完了しておき、入港する輸送船の兵器・弾薬・資材の揚陸作業、兵員の上陸を実施しなければならない。陣頭指揮の富田少佐は獅子吼し、目は血走り、いつになく殺気立っていた。

北部セレベスへ、約五千名の将兵と兵器、弾薬などが投入される。それは、敵の上陸を予想した大作戦の展開を告げるものであろう。現役の参謀が自ら戦闘指揮所を港に設置して作業の指揮をとることは、異例と言ってもよい。第二方面軍司令部の作戦行動がメナドに集中するとすれば、いよいよ大事の出来と覚悟しなければならなかった。ついに逃げきれず、ここが死に場所になるのかと思い、私たちは緊張した。

富田参謀は叫んだ。

「今度、絶対不可能と思われた内地から直行の大型輸送船二隻が入ってくるのだ。この二、三

日のうちにだ。いや、明日かもわからん。敵機の総攻撃を覚悟し、今回の揚塔作業を『決死揚塔作業』と命名する。死んでもやりとげろ」

しかし、私たちの直属上官・野村中尉は、富田の殺気とはうらはらに、どこか飄々としていた。彼は、指揮所と作業場のあいだを往復し、命令を伝えたり。参謀と大尉の間に割って入って、いつも落ち着いてゆうゆうと連絡をとっていた。

「おまえら、チャツ、チャツと部下をうまく掌握して、早うやれいのっ」。

四国弁丸出しの、これが突貫作業の命令であった。張り切った現役将校と老幹候出身将校の違いであるが、野村中尉はいささか変わっていた。

現役のパリパリの将校が指揮すると身もひきしまり能率はあがるかもしれないが、指揮される方は窮屈すぎる。切れ味のよい軍刀の下でおびえているような奴隷的な心情にもなる。ときに、反抗的な気持ちにもなる。富田少佐や大竹大尉の叱咤には、そんな威圧が感じられた。そこをほどよく調和させ、関根部隊らしいペースで愉快地に仕事できたのは、野村中尉のおかげであった。野村中尉は出身地の方言を使って私たちに笑わせさえした。中尉は土佐の出身で、古参の幹部候補生あがりである。

関根連隊は、士官学校出の職業軍人から一度退役して招集された予備役中佐の関根連隊長のほかは、全部、幹部候補生あがりの将校ばかりであった。下士官兵は、中国戦線に出動経験のある現役兵が大部分を占め、三分の二は東北地方、あとは全国からの招集兵である補充兵もまじっていた。連隊長はいちおう筋のとおった生粋の軍人で、下士官兵の主力は現役兵であるため、私のような幹部候補生あがりの若い将校はその間にはさまれて、苦勞も多かった。軍人として現役の将校にはとてもかなわないというひけめがあり、若い少尉のほやほやは、自信喪失と劣等感で頭があがらなかった。

それを知って現役の将校はビシビシ威嚇の鞭をふるう。「その少尉、なんだそれは。バカヤロウ」というふうに悪罵を浴びせ、鍛えようとする。私たちはますます自信をなくし、萎縮する。

たしかに幹候制度は即席の幹部を養成するしくみであるが、いざ戦場へ引っ張っていかれても、階級どおりの任務を遂行できるかどうかあやしいものであった。旧制中学以上の学歴のある者が入営に際して幹部候補生を志願すれば、成績に応じて、甲種、乙種にわけられ、特別教育を施されて、甲種合格者は見習士官、乙種合格者は伍長の階級を与えられる。一年余の速成教育だけで将校や下士官（伍長）になれるのだが、もちろん、幹候出の少尉と幼年学校から士官学校にすすんだ生え抜きの少尉とでは、同じ少尉でも実質的に雲泥の相違があった。

しかし、士官学校出の将校は、兵士を殺すことぐらいはへのカップの気性のはげしい人が多かったから、兵士はどこかしら抜けた甘い幹候出の上官をむしろ歓迎した。

野村中尉の老巧さは、長い戦場生活から学びとった幹候上がりの知恵であるにちがいない。こういうやりかたもあるのだ、と私たちは内心大いに敬服していた。だからと言って誰でも簡単に

真似のできることはないが、軍人らしからぬ方法、人間的な接触のしかたで部隊を掌握する一つの方法であろう。

ともかく、私たち若い少尉は富田少佐の殺気をやわらげるように調和する野村中尉のおかげで、むしろ愉快地部下を掌握し、作業能率を上げることができた。

しかし、明朝で作業が完了するという土壇場にきて、敵機の空襲を受けた。

月明の空は、襲来する敵機の爆音におおわれた。港の本船はじめ停泊中の船舶は、パツ、パツと消灯、「作業停止！」の号令が指揮所から発せられた。「待避！」と野村中尉が叫んだ。なぜか、空襲警報のサイレンは鳴らなかった。

ちょうどそのとき、五、六台のトラックが棧橋へ戻ってきた。作業場の灯火はことごとく消され、真っ暗闇の沈黙が次におとずれる爆撃の恐怖を示していた。「消せ、消せ、ライトを消せ！」近づくトラックに向かって兵士たちはさげんだ。トラックの兵士は自分のエンジン音で敵機の爆音が聞こえないらしい。やっとトラックのライトが消えたとき、空襲警報のサイレンもわめきだした。そのときすでに、敵爆撃機の第一陣は頭上に来ていたのである。

敵は、トラックのヘッドライトを目標に、機首を埠頭作業場にむけたらしい。突如、照明弾の投下でメナド皆あと一円は敵の視界にさらされてしまった。照明弾が消えると、旋回急降下の不気味な音が伝わり、不思議に研ぎすまされた私の耳に、スル、スル、スル・・・爆弾の落ちてくる音が聞こえた。直撃を食らえば、一発で数十名が粉みじんになるはずであった。みんな近くに散開し、あちらこちらに伏せている。わたしだけが立っていた。

こうなれば、逃げて、隠れて、伏せて、やられるときにはやられるのである。もう、爆撃はいやだ。こんな体験の繰り返しはやりきれない。憤怒と意地と運だめしの気持がごちゃ混ぜになって不思議な心境になった。私はその場を動こうともせず、直立不動の姿勢で立っていた。

「スル、スル、スル、・・・」爆弾の落ちてくる音がわかり、着弾するまでのわずか数秒かの間に高速撮影のフィルムを逆回転させるような、緩慢な長い思考があった。不思議な心境である。もう落ちて来るか。粉碎された瞬間、人間はどうなるのか。それは一秒の何十分の一かのことであったろうが、なあがいながい、耐えられないほどの長い時間を感じられた。

爆弾は百メートル前方の水際に落下した。閃光と轟音。私はちょっと前のめりにだけにすぎない。からだを撫でてみるまでもなかった。生きている。

不思議なことに敵機は一発落としただけで風のように吹きすぎて行った。港の船舶も、埠頭の作業場も、人員資材とも何の被害もうけなかった。

作業員を整列させて人員点呼。各作業場毎に損害の有無を野村中尉に報告したが、私の作業員だけ半数近くが戻っていなかった。逃げ足早くジャングルまで退避し、自分の穴のなかでじっとうずくまっているのだろう。爆撃の洗礼を何度もうけた兵士たちは、臨機応変、いつものように関根部隊流の退避をしたにちがいない。しかし、今夜はいつもとちがっていた。総指揮官は方面

軍司令部直属の富田参謀である。私は少佐の前に呼び出されて、はげしく叱責された。ついに、将校全員が集合をかけられた。

「バカ、バカ、バカ」と少佐は怒号した。「貴様ら少尉、作業場長がオロオロしとるから、部下に逃げられるんだ。捜してこい。十分以内に全員集合、作業再開せよ。明払暁、大型輸送船二隻、急に入港の予定である。それまでに、今の作業を完了せよ。輸送船入港時の揚塔作業中は、敵の空襲あるも作業は続行する。わかったか、わかったか」

私たちは青くなって承服するより他なかった。残りの兵士に、めぼしい場所をさがさせたがよほど遠くへ行ったとみえて、とうとう見つからなかった。私は仕方なく作業を再開したが、次第に腹がたってきた。「しかし、逃げ足が速くなつたなあ。いいさ、何も死に急ぐことはない」。私も軍刀がついで避難の戦闘を切ったものだ。しかし、今回は状況が違う。まかり間違えば方面軍の問題となり、敵前逃亡の処罰を食うかもしれないのだ。私は責任上、まじめに陸軍刑法第七十五条を思いうかべていた。

・・・故ナク役職ヲ離シ、又ハ役職ニ就カサル者ハ左ノ区分ニ従ツテ処断ス。

1. 敵前ナルトキハ死刑、無期若シクハ五年以上ノ懲役又ハ禁固ニ処ス

ここは「敵前」なのである。

「まあ、ま、そうむきにならんで、つかされえ」と、野村中尉はにこにこして私をなだめた。チャツ、チャツとやっちょれば、帰ってくるきに」

そのとおりであった。いつの間にか人員が増えている。私は点呼をとってみた。全員、ちゃっかりして、いつもの顔がそろっていた。ひとりも欠けていない。

「逃げたヤツは、三步まえにでろ！」私はどなりつけた。「俺は知ってるぞ。逃げたヤツは自分の胸に手をあてて見ろ。これが退避か。敵前逃亡になることを考えてみたことがあるか。逃げたヤツはいくら知らん顔をして、戦友が知っておる。いや、自分自身が一番よく知っているはずだ。あくまで、自分を偽るつもりなら出なくてもよい。逃げたヤツは朝メシを食うな。出ろ、潔く三步前へ出ろ」

幹候出身の私は、志那事変以来歴戦の勇士たちに劣等感を持っていた。遠慮をしていた。だから、甘く見られたかも知れなかった。これからはそれでは困る。私の怒りは、敵機の爆撃中、不動の姿勢をとっていた自信が反映していたのかもしれない。兵士たちの前でこんなに怒ったのは初めてであった。

兵士たちは、私の怒りに驚いたのであろう。反省もしたらしかった。はじめはためらっていたが、二名、三名と前に出ると、逃げた連中はことごとく列をはなれ、ビンタを待つ表情で私の前に並んだ。

「ようし、わかった。解散して朝食。みんなといっしょに食え。大型輸送船がもうすぐ入ってく

るぞ」

私の胸もスカッと晴れた。そして感動していた。部下掌握のコツを、やっと会得したように思われたのであった。だが、輸送船入港時の作業は大変だと思う。敵機は大爆撃を敢行するにちがいない。富田少佐の前で、先ほどの汚名をそそぐためにも、一步も退かずに作業を貫徹してみたい。阿鼻叫喚の中での壮烈な揚塔作業の光景が、私の目の奥にうかんだ。あるいはここが部下達との最後の別れになるかもしれない。

私は、悲壮な気分で兵士たちにとり囲まれながら朝食を終えた。おそらく、今度はだれ一人逃げないだろう。そう思うと、私は部下たちがいとおしくなった。

朝の太陽がまぶしく海面に照り映えるころ、駆逐艦二隻が沖合に雄姿をあらわした。日本の軍艦旗である。そのあとに大型輸送船が続いているはずであった。港内の投錨位置はわかっていた。私たちは、作業員を満載した大型発動機艇に空のボート数隻を係留して、日の丸を打ち振りながら埠頭を出発した。大発は小気味よく、おだやかな金波・銀波のうねりをきりさいて進む。

駆逐艦は舳先をそろえて停止していたが、なぜか、輸送船が続いている気配はなかった。駆逐艦の上甲板には、裸同然の兵士たちがひしめいていた。舷側で手をふっている者もいる。

軍装も凛々しい歩兵部隊の到着を期待していた私たちは、衝撃をうけた。駆逐艦から最初に私たちの大発に乗り移ってきた海軍士官は、輸送船二隻が敵潜水艦の魚雷攻撃を受け、この近海で撃沈されたことを告げた。歩兵部隊の大部分は、兵器・弾薬・貨物とともに、セレバスの島影を望む位置で、海のもくずと化していたのである。

輸送船沈没の際、海になげだされて浮きつ沈みつしていたわずかな兵員が、駆逐艦の救命ボートに拾い上げられ、万死に一生を得てメナド港に到着した。

輸送船轟沈前後のくわしい状況は、埠頭棧橋へ引き上げたのちも、説明されなかった。富田少佐は悲痛なにがりきった表情で「作業停止、解散」をあっさり告げた。敵の機影はなく、海面も埠頭周辺も嘘のように平穏で、輝くばかりに鮮烈でうつくしかった。「決死揚塔作業」は、一陣の突風のように解散した。

轟沈した二隻の輸送船は、めき志こ丸と、はあふる丸ということである。 (第二部 完)